

## ヴァチェスラフ・ピエツフ『ロシアのアネクドート』

Вячеслав Пьецух «Русские анекдоты»

今田和美

### 1. 作家について

1946年モスクワ生まれ。'70年にモスクワ教育大学卒業後、約10年間教師として働く。'73年に短編を書き始め、'78年活字デビュー。'83年に単行本初出版。'88年作家同盟加入。'93-'95年「諸民族の友好」誌編集長。モスクワ在住。

Пьецух という珍しい姓は、本人の説明によればポーランド起源（ポーランド語で暖炉を意味する piec の上に常にいる者、すなわち怠け者を意味する）で“ピエーツフ”と発音するのが正しいようだ。民族的にはポーランド以外にもロシア、ウクライナに加えてチェチェンかオセットの血も混じっているという。

### 2. 作品について

『ロシアのアネクドート』はズナーミヤ誌の1997年4月号に掲載された合計23のアネクドート風短編の寄せ集め（各作品にはタイトルはなく、No.1-23の番号が順番に振られている）で、後に同名の単行本<sup>1</sup>に収録された。ズナーミヤ誌の2000年7月号にも同じタイトルのもとにNo.23-36の番号を振った14話が発表されており、97年4月号の続きのようだがなぜかNo.23（全く別の話）が重複している。語り手は作者を思わせる男性で、口語、俗語、古語や時には造語もまじえながら比較的平易で簡潔な文体で語っている。

作品について、ピエツフ自身は次のように述べている。「ある時親しい人の集まりで“ロシアのアネクドート”を朗読した。この作品は、プロットもイメージもないので短編とは呼べない一口話<sup>バイキ</sup>の連作だ。これは、ロシアという獣の皮を一枚一枚はがしていくという私の主な仕事の延長だ。肉に達するまで気が済まない。少なくとも私にとっては謎はまだたっぷりある。聞き手の反応とその後の結果から察するに朗読は成功したようだ。すぐにズナーミヤ誌が（1997年の一訳注）4月号に掲載してくれることになった」<sup>2</sup>

アネクドート性の強い短編を得意分野の一つとしてきたピエツフだが、“アネクドート”という言葉を前面に出した作品を書いたのは今回が初めてであり、作品発表の経緯（まず朗読された後に活字になった）や作者によるジャンルの定義（「プロットもイメージもな

---

<sup>1</sup> Пьецух, В. *Русские анекдоты*. СПб.: Петербургский писатель. 2000.

<sup>2</sup> “Русский - это не только национальность, но прежде всего настроение” // Литературная газета. 16.IV.97.№15. с.10.

いので短編とは呼べない一口話<sup>バイキ</sup>の連作」）、単行本の歌い文句（「歴史上の人物たちの人生に起こった面白おかしい、あるいは教訓的な出来事をめぐるアネクドートの数々」）などからも、彼がこの作品でアネクドート性を強く意識していることが伺える。具体的には以下のようなアネクドートの手法が取り入れられている。

簡潔性：できる限り前置きを省略しすぐに本題に入ることができるよう、導入部の状況説明にアネクドートに通じる簡潔で凝縮された語りが多用されており、長い修飾語をつけた名詞をたたみかけるようにコンマでつなげていく手法を用いての典型的なソ連の都市の風景描写は卓越している。

連作性：各エピソードは、一見主人公にも語られる状況にも共通点がなく、様々な小話の寄せ集めにすぎないような印象を受ける。しかしよく見ると前後するエピソードをつなぐフレーズが何ヶ所もあり、一見各々無関係で独立しているようにみえる37のエピソードは、実は連作としてまとまることにより「ソ連時代とソ連崩壊後のロシア」の全体像を叙事詩的に読者の前に提示しえていることがわかる。

暴露機能と反神話性、非英雄化：各エピソードで語られるのはソ連時代にはタブーであったテーマである。さらに、肯定的主人公は一人も登場せず、登場するのは程度の差はあれ世間一般から外れた奇妙な人々ばかりだ。ソ連崩壊後に発表された本作品に政治性を見出すのは滑稽だが、ソ連時代であれば明らかに反ソ的として禁止されたであろうテーマや人物を暴露的に描き、主人公を非英雄化し、神話に対する「反神話」となっている点ではいわゆる政治アネクドートに近いと言える。また、地名や機関名が非常にソ連的で、それらが執拗に繰り返されることによってもばかばかしさや反神話性が強調されている。

特徴の露出：アネクドートの主たる美的機能は「現象や習慣の特徴、実在の人物や一連の類型の特徴を、逆説的に組み立てられた形式によって露出し明らかにすること（クルガーノフ）<sup>3</sup>だが、各エピソードで作者ピエツフが追求しているのも奇妙さの背後に潜む何らかの特徴の露出（作者自身の表現を借りれば「ロシアという獣の皮を一枚一枚はがしていく」作業）である。露出される特徴で最も目立つのは「語りた」という欲求であり、ほとんどのエピソードにも語りたくて仕方がない人々が登場する。彼らの「語り」は一方的なものであれ対話や議論であれ、例外なく激しいが空疎である。ただ、そうした特徴に対し語り手（作者）は何らかの評価を下すことを避け、中立的で淡々とした態度を崩さない。風刺したり批判するというよりは、むしろ諦観したり面白がっている観がある。

図式指向性：「ロシアのアネクドート」では、露出作業を経たロシア及びロシア人の特徴はしばしば、哲学的で格言めいた表現となって表れるが、そこには常に人間存在や世界

---

<sup>3</sup> Курганов, Е. *Анекдот как жанр*. СПб.: Академический проект. 1997. с.25.

を凝縮した「ある種の図式あるいは公式であろうとするアネクドートの指向」(テルツ)<sup>4</sup>の反映が見て取れる。「ロシアの生活の歴史は閉じた円のように循環している」「ヨーロッパ最後の真に文化的な民族はもちろん我々(ロシア人一訳注)である」「ロシア人は“下司の知恵はあとから”で先を読むことができない」などの簡潔な言葉は多くの場合、エピソード冒頭で語り手や登場人物によって口にされ、時にはエピソード中も繰り返される。さらにエピソード全体がそれらの言葉の具体例となっている。

予期せぬ結末：多くのエピソードで、予期せぬ意外な結末(多くは登場人物の台詞)が重要な落ちの役割を果たしており、中には極めてアネクドートの同音異義語による言葉遊びに基づいて作られたエピソードも見られる。

### 各エピソードのあらすじ

(第一話) 雨のヴォズネセンスコエ墓地で、暴飲で死んだある海洋画家の葬式が行われていた。前衛画家が弔辞で故人を偉大な画家と持ち上げるが、風俗画家が反論、葬儀そっちのけで相手流派(リアリズムと前衛芸術)を罵倒しあう二人に、参列者たちは呆気に取られている。そこに墓掘人夫の「騒ぎはおしまいだ、食事にしよう!」という突然の一言。

(第二話) 地吹雪舞う冬のモスクワ、朝四時。友達のヴェーラに電話をかけてくだらないことを長々と話して聞かせた後、最も恐ろしいニュースは、自分が我が国の政府首脳はろくでなしばかりだと結論に達したということだ、と言うジーナ。

(第三話) 文学大学をけんかで退学となり製菓工場主をしているヴィクトル・モロチコフは、ある日場末のビヤホールで喧嘩をして警察署に連行される。賄賂を渡して事件をもみ消したヴィクトルは、その足でカフェへ行き今度は愛国主義者でビジネスマンの男に議論を吹っかける。

(第四話) 熱血歴史教師バラバーノフのクラスで、ある放課後、古代ローマの奴隷の反乱の芝居が行われている。奴隷解放の背景にある社会の発展を力説するバラバーノフに、親が賃金を払ってもらえず半年も電気を止められている貴族役の少年たちが反論する。

(第五話) クレーン操作係のイワン・ジェレズノダロージュヌイには幼い頃から病的な放浪癖があり、仕事や住所を始終変えている。新しい町に着くとすぐに職と寮のベッドにありつくが、労働者たちのばか話や飲酒、不潔さに嫌気がさしてすぐに出て行く生活を続けていた。'92年の冬にイスラエルに移住。ロシアの町と全く同じ退屈な風景の中、案内所で機械化移動建設隊はあるかと尋ねると、よく見た顔をした案内嬢にソ連で聞き飽きた「そんなものはありません」という台詞を言われる。

(第六話) 怪しげな株式会社《Роспреступность》の会計係ヤコフ・ベルキンが、ビール

---

<sup>4</sup> Терц, А. Анекдот в анекдоте. В кн. Nivat, G. (ed.), *Одна или две русских литературы?* (Lausanne, 1981), p.171.

を飲みながら知人に自分のこれまでの不運な人生を語り、様々な災難に出会いはしたがなぜか自分の人生が気に入っている、と言う。

(第七話) アルコール飲料製造の合併企業を作るためロシアにやってきた有名なオランダの会社社長ヴァン・ブッツ氏だが、まもなく社員の賃金や製品を横領していることが発覚する。裁判所でなぜこそ泥のような真似をしたのかとたずねられて曰く、「ロシアの空気がしたくもないのに盗みをさせるのだ」。

(第八話) 州立メイエルホリド劇団がコルホーズ「働き者」に「ハムレット」を出張公演しに出かけたが、観客は少なく半分は酔っ払い。あまりの騒がしさに役者たちは芝居を中断、観客の一人と長いこと言い争う。芝居は何とか最後まで上演されたが、それ以後この劇団はコルホーズへは二度と出張しなかった。

(第九話) 海外旅行など夢だった時代、マガダン発ウファ行の飛行機内でハイジャックが起こる。犯人は手榴弾を武器にパキスタンへ向かうよう要求するが、海千山千の労働者である乗客は狼狽するどころか、かえって無料の外国旅行を喜び、犯人の存在を忘れて旅先での心配を始める。そのうち犯人は乗務員室に軟禁され、事件は落着。

(第十話) 妻と娘が出かけた寂しさを紛らわそうと、酒を飲みいたずら電話をかけるセリョージャ・ムイスリン。電話の相手は意外にも哲学的な人生論を展開し、最後には小学校も出ていない孤児あがりのセリョージャを納得させてしまう。

(第十一話) モスクワのアパートの中庭に男が坐って、あくせくする周囲の人間たちに「学者たちが一万年後にはモスクワは一面の海になると書いている…」「どうせ一万年後にはモスクワは海の底なんだから無駄なことだ…」とうそぶく。

(第十二話) ヴォログダ州のクラスノアルメイスキー村で水道管が壊れて困っているところにある日、自家用飛行船で世界一周中だった大金持のアメリカ人ウィリアム・ダブスが不時着する。村人たちは大歓迎、結局どうなったのかは不明だが、確かなのは、今では村議会にはダブスの肖像画が飾られているし、生徒たちはダブスについての作文を書いているということだ。

(第十三話) コーリャ・ヴォロンコフの妻タマーラは、才色兼備な上サボテン栽培家として全国的に有名だったが、夫を尻に敷いていた。ある時がまんできなくなったコーリャは、妻が大事にしているサボテンに毎夜小便をかけて枯らし、復讐しようとする。ところがサボテンは逆にどんどん成長、朝は公衆便所の、夜は酒臭さとマホルカ煙草とブーツのにおいをさせたため、妻の名はブリタニカ百科事典に載る結果になってしまう。

(第十四話) ハイファ港近くの小さな町では、至る所で昔の記憶とないまぜになった激論が交わされ、一日中熱気に満ちている。今日も道で出会った老人二人の何気ない世間話が、ついには第二十回党大会や党員としての良心をめぐる激論に発展してしまう。

(第十五話) 相互不払いに苦しむ亜麻栽培コルホーズ「正しい道」。支払いのかわりの物納がめぐりめぐって一年間医療費がただになったコルホーズ員たちが、病院の前に行

列をつくる。翌年、コルホーズは亜麻をジグリの軸受けと交換。あまりの可笑しさにコルホーズ幹部三人の手術痕が破れてしまった。

(第十六話) 1970年代、スヴェルドロフスク大学で反政府的なタイプ原稿を流布した万年学生のイワン・ルカモイニコフが逮捕される。黙秘するイワンだが取り調べ官に「具体的に何に不満なんだ？」と尋ねられ、「すべてに」と答える。

(第十七話) 社会学が解禁になったばかりの1960年代、コワリョフという男が「産業労働における因果関係」に没頭する。だがさすがの彼も、オデッサ化学工場のニトロ塗料と第二頸椎脱臼との因果関係に思い至ったかどうかは疑わしい。ある日コワリョフが、新しく手に入れたアパートの壁を塗り替えるため盥に入れておいたペンキ落とし用のアセトン水を水と間違えた妻が、彼お気に入りのナイロン・シャツを洗濯しようとして溶かしてしまう。コワリョフはショックでトイレに閉じこもり煙草に火を点けるが、不注意から爆発が起こって下半身を大火傷し、第二頸椎を脱臼してしまったのだ。

(第十八話) 機関長ヴァロージャ・クレミョーノフが三ヶ月の航海に出るので見送りの宴会が開かれた。そのうち議論が始まり、一睡もせずに出発したヴァロージャが三ヶ月後に帰宅してみると、何と議論がまだ続いていて友人たちは彼に気付かない。

(第十九話) ヴィクトル・サマホードフという変わり者がある日、地下鉄建設を思いつく。半年間毎日独力で掘り続けたが、妻に逃げられて断念、ショックで寝込んでしまう。彼をもてあました村ソヴィエトからの要請で州都オリョールへ出張するが、教育部長を人質にする事件を起こし、精神鑑定に送られた後投獄されてしまう。

(第二十話) アレクセイ・コロヴィチは祖父の旧友の孫娘のリュボーフィに一目ぼれするが、不運な事件から酒に溺れ、そのためにリュボーフィと間違えて少し彼女に似ている友達のヴェーラと結婚してしまう。ある日リュボーフィ本人が訪ねて来て間違いに気付くアレクセイだが、現実を受け入れヴェーラと末永く幸せに暮らす。

(第二十一話) 有名な彫刻家セミョーン・フィアルコのアトリエに週二回掃除にやって来るホームレスは、仕事は丁寧だが、酔っ払って寝てばかりのフィアルコになりすまし、二束三文で作品を売って買手に嬉しいショックを与えていた。

(第二十二話) シェレメーチェヴォ第二空港の荷物係エレナ・ポトロシュコーワのところへある日、パリからの便で到着したばかりのフランス人が、預けたはずの荷物が出てこないと駆けつけて来る。エレナの助言通り別便のコーナーで荷物が見つかる。なぜわかったのかと尋ねられたエレナは「長いことロシアに住んでいるから」と答え、逆に「なぜロシアへ？」と質問。フランス人は長いことためらった末に「ロシアには素晴らしい作家たちがいるから…」と答えた。

(第二十三話) ある時作家のズーエフが講演中に、聴衆から「架空の物語など無益。我々が読みたいのは幸せになる方法を教えてくれる人生の教科書だ」という指摘を受けて次のように答える。「少なくとも文学が読者を不幸から守っていることは医学的事実だ。部屋の隅で読書をしている限りは頭上に煉瓦が落ちて来ることもないし、もめご

とを起こして警察の世話になることもない、家庭は平和だしお金も使わなくてよい、誰の気にも触らない」聴衆は沈黙した。

- (第二十三話) 舞台俳優セルガイ・カジューリンは「知恵の悲しみ」のチャツキー役にのめりこんで抜け出せなくなり、劇団を退団した挙げ句スターリン誹謗のかどで逮捕されてしまう。
- (第二十四話) ウルイビンスクという町の技術在庫調査局長が汚職で次々に解雇され、清廉潔白な人物を探すが見つからない。結局、ちょっと頭がおかしいが誠実な精神病院の入院患者が採用され、乗り込んできたマフィアの親玉の賄賂を拒む。
- (第二十五話) モスクワの泥酔者留置場に入れられた二人の男が、釈放されたにもかかわらず延々議論を続ける。
- (第二十六話) コロムナ郊外のオクチャーブリ村のバラックに住むブガーエワばあさんが、家の雨漏り問題を解決すべくモスクワにあるスイス大使館に乗り込み、まんまと新しい共同アパートの一室を手に入れる。
- (第二十七話) 1926年のモスクワ。詩人イワン・ホーレヌィが路面電車にひかれて死にかけながら、通りがかった友人に延々遺言を述べて周囲を興ざめさせる。
- (第二十八話) スコロドゥーモフ夫妻の金婚式の祝辞で、式とは無関係なロシアの歴史やスターリンの圧政についての話を延々として列席者をいらいらさせるプロトヴィチキン老人。最後には彼がスピーチの中で口にした”горько” (つらい) という言葉を皆が故意に別の意味 (酒が苦いからキスしろ) にとって繰り返す。
- (第二十九話) 妻に出て行かれ傷心のコーリャ・スタコフはある日、急性心臓痙攣で救急車を呼ぶ。妻のことで同情してくれた医師に気をよくしたコーリャはそれから二度も救急車を呼び、医師との会話で孤独を慰める。三度目にやってきた老医師の「つらい時はプーシキンの詩を読め」という忠告を実行するようになったコーリャは、それ以来救急車を呼ぶのをやめた。
- (第三十話) 「禍福はあざなえる縄のごとし」。女たらしのヴォロージャ・ブトキンは酔って三階の窓から落ち右足を骨折、びっこになってしまう。絶望して大学を辞め、行商を始めるが、ある日酔った勢いで商品を通行人にただでばらまく。怒った雇い主に橋から突き落とされて再度右足を骨折したおかげでびっこが治り、大学に復学、またもやもて男ぶりを発揮する。
- (第三十一話) 1990年代半ば、コルホーズ「イリイチによって」がなぜか二階建ての豪華アパートを建て、コルホーズ員たちの家族が入居した。しかしコルホーズの経営は悪化、酒代に困った男たちがアパートの水道管や電線を切り売りしたために、水道や電気が止まる。
- (第三十二話) レニングラード大学音響学研究室長アントン・ソコーリスキーは、ドアや壁が過去に吸収した音声を再生する装置を発明、早速自宅の古いアパートで実験するが、再生された音声から、妻が自分の同僚と浮気していることがわかってしまう。歴

史から学ぶのは「発明するなかれ」ということだ。

(第三十三話) ロシアでは大泥棒は無罪だがこそ泥は裁かれる、という話。泥棒ムトフキンが 345 ルーブル以下の窃盗は恩赦対象と知り、少なめに盗んで自首するが、大物が無罪になった直後で機嫌の悪い裁判官たちに腹いせに有罪にされてしまう。

(第三十四話) 伐採企業「コムソモリスキー」の伐採人夫セヴァ・カイマノフがくじでチェコへの旅行クーポンに当たる。プラハを散歩中にすれ違った地元の老人の一言で、突然自分がそこでは“外国人”だと気づき、ショックを受けたセヴァは、帰国後“外国人”のようなふるまいをするようになる。

(第三十五話) ヤロスラブリ州知事選のキャンペーン中、右派社会主義者の候補の立会演説にうんざりしたマクシム・ストレルコフは途中退席して帰る途中、当直室で候補者のボディ・ガードたちがカラシニコフ銃をそばにクロスワードパズルを解いているのを立ち聞きし、最後にはこらえきれず答を教えてしまう。

(第三十六話) 朝のモスクワ。ゴミ捨て用コンテナの陰で、捨てられていた古本を夢中で読みふける浮浪者。彼がどうして社会から脱落したかより、今何という本を読んでいるのかが気になってしまうのだから、人間とは残酷なものだ。

### 3. コメント

本来純粋な口承文芸であったロシアのアネクドートが今、記述された文学の中に入り込み、影響力を強めている。チェーホフやハルムス、ゾーシチェンコにはじまるアネクドートの要素の濃い小説の系譜は、1970年代以降ヴォイノーヴィチ、ヴェネディクト・エロフエーエフ、アクショーノフ、ジノヴィエフ、エフゲーニー・ポポフ、ドヴラートフ、ヴェレルら多くの現代作家により継承されて発展し、ますます目立つようになった。こうした傾向を、現代文学が長編小説に代表される「大きな物語」の時代から、マイクロ・ストーリーの集積であるアネクドートの時代への転機を迎えているとの意味で「文学のアネクドート化」と呼ぶクルガーノフのような研究者もいる<sup>5</sup>。

そのクルガーノフは、アネクドート風短編の書き手としてのチェーホフの後継者にドヴラートフを挙げているが、興味深いことにピエツフもまたチェーホフ的資質の持ち主とされ、自作にチェーホフを連想させるタイトルをつけたり、「そもそも私は“チェーホフ主義(чехизм)”を除いては、いかなるイズムにも親しみを感じない」<sup>6</sup>と発言するなど、自身

---

<sup>5</sup> Курганов, Е. Сергей Довлатов и линия анекдотов в русской прозе. в кн. *Сергей Довлатов: Творчество, личность, судьба. Итоги Первой международной конференции «Довлатовские чтения»*. СПб.: Звезда. 1999. сс.208-223.

<sup>6</sup> “Русский - это не только национальность, но прежде всего настроение” // Литературная газета. 16.IV.97.№15. с.10.

かなりチェーホフを意識している。チェーホフとピエツフの作風の類似については改めて詳細に検討する必要があるが、少なくとも、文学の実用性や教訓性を否定しつつ不条理な日常をアネクドート風の軽い筆致で描き出している、という点でピエツフは、チェーホフに始まるアネクドート風短編の系譜に連なる存在と呼べるだろう。「ロシアのアネクドート」は、そうしたアネクドート風短編の典型例である。

なお、口承アネクドートの記述された文学への影響という観点からの本作品のより詳細な分析を、近刊予定の東京大学大学院人文社会系研究科スラブ語スラブ文学研究室年報「SLAVISTIKA」第16号所載の拙論「現代ロシア短編小説におけるアネクドートの要素—ピエツフ「ロシアのアネクドート」—」で行っているの合わせて参照されたい。